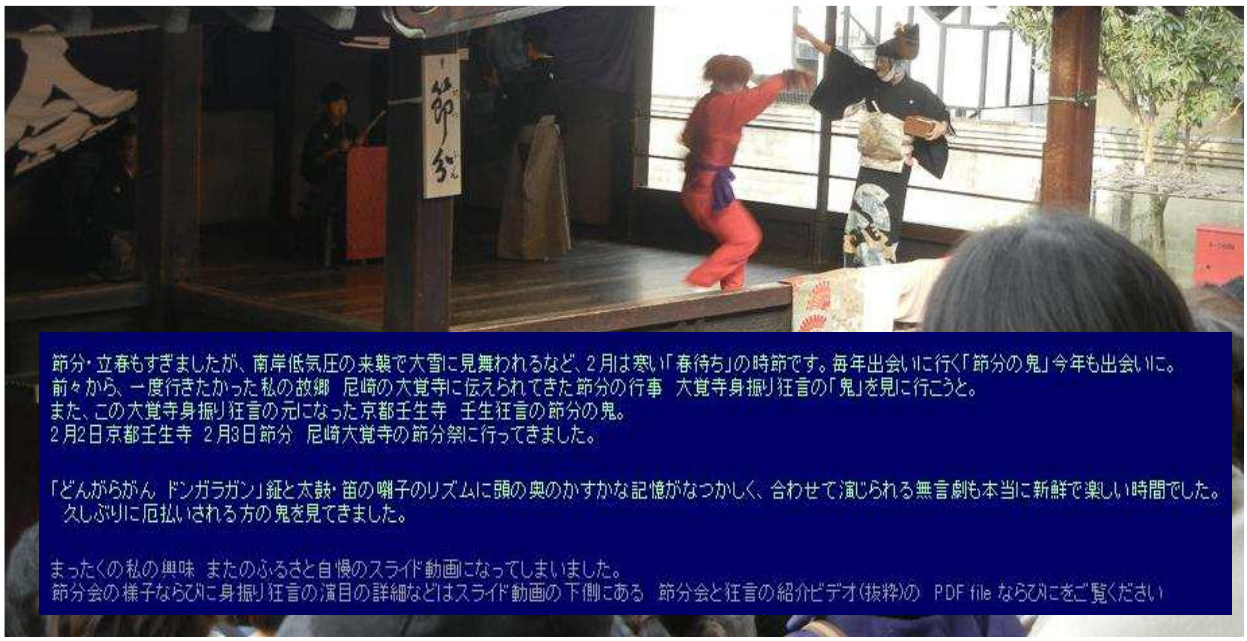


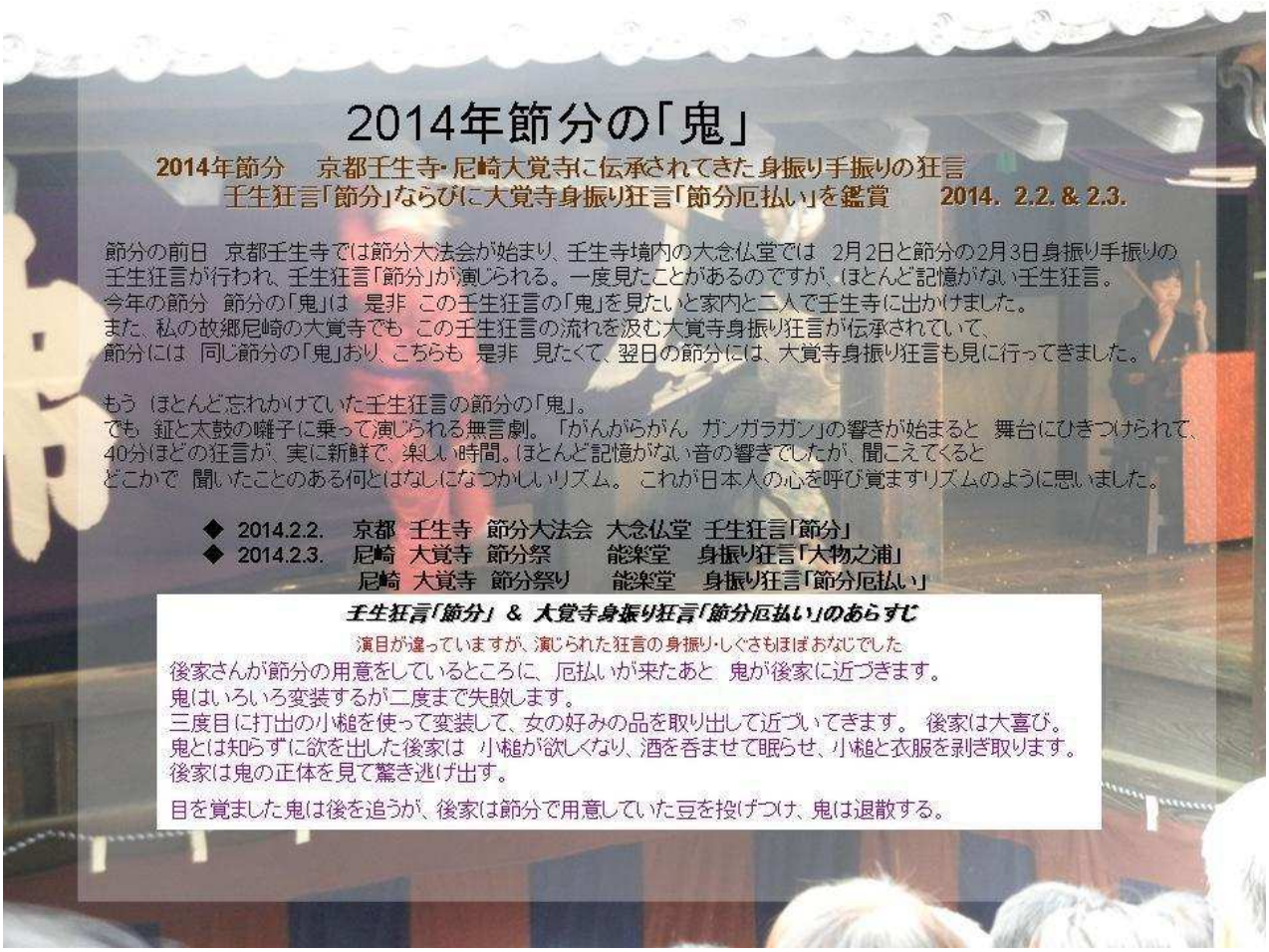
2014年節分の鬼 壬生狂言&大覚寺狂言 2.2. & 2.3.



節分・立春もすぎましたが、南岸低気圧の来襲で大雪に見舞われるなど、2月は寒い「春待ち」の時節です。毎年出会いに行く「節分の鬼」今年も出会いに。
前々から、一度行きたかった私の故郷 尼崎の大覚寺に伝えられてきた節分の行事 大覚寺身振り狂言の「鬼」を見に行こうと。
また、この大覚寺身振り狂言の元になった京都壬生寺 壬生狂言の節分の鬼。
2月2日京都壬生寺 2月3日節分 尼崎大覚寺の節分祭に行ってきました。

「どんがらがん ドンガラガン」鉦と太鼓・笛の囃子のリズムに頭の奥のかすかな記憶がなつかしく、合わせて演じられる無言劇も本当に新鮮で楽しい時間でした。
久しぶりに厄払いされる方の鬼を見てきました。

まったくの私の興味 またのふるさと自慢のスライド動画になってしまいました。
節分会の様子ならびに身振り狂言の演目の詳細などはスライド動画の下側にある 節分会と狂言の紹介ビデオ(抜粋)の PDF file ならびにをご覧ください



2014年節分の「鬼」

2014年節分 京都壬生寺・尼崎大覚寺に伝承されてきた身振り手振りの狂言
壬生狂言「節分」ならびに大覚寺身振り狂言「節分厄払い」を鑑賞 2014. 2.2. & 2.3.

節分の前日 京都壬生寺では節分大法会が始まり、壬生寺境内の大念仏堂では 2月2日と節分の2月3日身振り手振りの壬生狂言が行われ、壬生狂言「節分」が演じられる。一度見たことがあるのですが、ほとんど記憶がない壬生狂言。
今年の節分 節分の「鬼」は 是非 この壬生狂言の「鬼」を見たいと家内と二人で壬生寺に出かけました。
また、私の故郷尼崎の大覚寺でも この壬生狂言の流れを汲む大覚寺身振り狂言が伝承されていて、
節分には 同じ節分の「鬼」おり、こちらも 是非 見たくて、翌日の節分には、大覚寺身振り狂言も見に行ってきました。

もう ほとんど忘れかけていた壬生狂言の節分の「鬼」。
でも 鉦と太鼓の囃子に乗って演じられる無言劇。「がんがらがん ガンガラガン」の響きが始まると 舞台にひきつけられて、
40分ほどの狂言が、実に新鮮で、楽しい時間。ほとんど記憶がない音の響きでしたが、聞こえてくると
どこかで 聞いたことのある何とはなしになつかしいリズム。 これが日本人の心を呼び覚ますリズムのように思いました。

- 2014.2.2. 京都 壬生寺 節分大法会 大念仏堂 壬生狂言「節分」
- 2014.2.3. 尼崎 大覚寺 節分祭 能楽堂 身振り狂言「大物之浦」
  尼崎 大覚寺 節分祭り 能楽堂 身振り狂言「節分厄払い」

壬生狂言「節分」 & 大覚寺身振り狂言「節分厄払い」のあらすじ

演目が違っていますが、演じられた狂言の身振り・しぐさもほぼおなじでした
後家さんが節分の用意をしているところに、厄払いが来たあと 鬼が後家に近づきます。
鬼はいろいろ変装するが二度まで失敗します。
三度目に打出の小槌を使って変装して、女の好みの品を取り出して近づいてきます。 後家は大喜び。
鬼とは知らずに欲を出した後家は 小槌が欲しくなり、酒を呑ませて眠らせ、小槌と衣服を剥ぎ取ります。
後家は鬼の正体を見て驚き逃げ出す。
目を覚ました鬼は後を追うが、後家は節分で用意していた豆を投げつけ、鬼は退散する。

京都　壬生寺の節分会　壬生狂言「節分」を見にゆく 2014.2.2.



京都　壬生寺　節分会の賑わい　2014.2.2.



壬生寺は二条城の南約1km。びっしり町家が詰まった壬生の街中にある。 新撰組が屯所を置いた場所。 京都は碁盤の目で仕切られているとはいえ、街中の碁盤の目の中は　今も路地が連なる細い道の両側にびっしり家並みが連なっている。
この家並みの中を歩くと、この壬生の地が江戸時代　京都の中心市街地の一部であったことを強く感じる。



壬生狂言「節分」が始まりました　2012.2.2.

壬生寺ホームページより　http://www.mibudera.com/kyougen.htm

壬生狂言「節分」＆大覚寺身振り狂言「節分厄払い」のあらすじ

後家さんが節分の用意をしているところに、厄払いが来たあと　鬼が後家に近づきます。
鬼はいろいろ変装するが二度まで失敗します。
三度目に打出の小槌を使って変装して、女の好みの品を取り出して近づいてきます。　後家は大喜び。
鬼とは知らずに欲を出した後家は　小槌が欲しくなり、酒を呑ませて眠らせ、小槌と衣服を剥ぎ取ります。
後家は鬼の正体を見て驚き逃げ出す。
目を覚ました鬼は後を追うが、後家は節分で用意していた豆を投げつけ、鬼は退散する。

**「鬼　(病気、災厄や貧困など様々な不幸)を招く甘い誘惑に負けずに、
マメ(まじめに、こつこつ)に働くことによってこそ、福徳は得られるものである」この事を教えた狂言で、
後家が鬼を追っ払った後は、鬼の小槌や着物も消え失せ、
後家はそれが危険な誘惑であったと悟るのである。**

壬生狂言 「節分」

壬生寺ホームページより　http://www.mibudera.com/kyougen.htm

この狂言は「鬼　(病気、災厄や貧困など様々な不幸)を招く甘い誘惑に負けずに、マメ(まじめに、こつこつ)に働くことによってこそ、福徳は得られるものである」ことを教えた狂言で、
後家が鬼を追っ払った後は、鬼の小槌や着物も消え失せ、後家はそれが危険な誘惑であったと悟るのである。

節分とは、本来、季節の分かれ目という意味で一年に四回もあるが、
一般にいう節分の日とは2月の立春の前日をいう。
この日の夜、鬼が嫌うという豆を「福は内、鬼は外」と唱えながらまいて、
鬼を追い払うという習慣がある。
毎年2月の壬生寺節分会は、寺の最大行事で、
十数万人もの参詣人で賑わうが、
この壬生狂言の『節分』を節分会に繰返し上演して、
参詣人の厄除招福を祈願している。



壬生狂言「節分」の狂言の詳細は　翌日の2月3日節分に　見に出かけた私の故郷　尼崎の大覚寺に伝わる　壬生狂言と同じ流れをくむ　尼崎大覚寺の身振り狂言「節分厄払い」を参照ください　　Mutsu Nakanishi



鬼の嫌いな豆を投げつけ、ようやく鬼を退散させる

京都　壬生寺　節分会　壬生狂言「節分」鑑賞　2014.2.2.

もう　ほとんど忘れかけていた壬生狂言。　でも　鉦と太鼓の「がんがらがん　ガンガラガン」の響きにひきつけられて、
舞台に見入っていました。　40分ほどの狂言が実に新鮮で、楽しい時間でした。

今から700年前の鎌倉時代に始まった壬生狂言　　群衆を前にして最もわかりやすい方法で仏の教えを説こうとして、
身ぶり手ぶりのパントマイム(無言劇)に仕組んだ持斎融通(じさいゆうづう)念佛を考えついたのが、壬生狂言の始まりと聞く。

鉦と太鼓と笛が奏でるゆっくりしたリズムに合わせて、身振り・しぐさで表現して演じる無言の仮面劇。
学生時代に一度見たはずなのですが、まったく記憶なし。
私の故郷尼崎にもこの狂言が残っていて、　記憶はごっちゃになっています。
京都では「壬生さんのカンデンデン」というのだそうですが、
私には　薄暗闇の寒い寺の境内に響き渡る「がんがらがん　ガンガラガン」の響きだけが頭に残っています。

簡単な筋で、身振りで内容がわかるので、40分ほどですが、狂言に引き込まれて、見ていて楽しい。
1時間待った甲斐があり、楽しい節分　　今年も「鬼」に出会えて　すっきりです。
壬生狂言でもうひとつ有名な「かわらけ割り」も是非見たかったのですが、4月の壬生狂言の機会に。

遠い記憶で　リズムしか覚えていませんが、何とはなしになつかしいリズムでした。
また、二条駅横に車を置いて壬生寺へいったのですが、「壬生」は古くから続く京都街中。
京都は碁盤の目と言いますが、その升目の中は路地が入り組んだ、狭い道の両側に町家がびっしり。
これも　日頃車の行き交う広い道に慣れた私には本当に新鮮。　また、壬生は今に続く京都の街中とつくづく思いました。
機会あれば　是非一度、京の町中探検に壬生へ

家内はイメージが変わるのがいやで、行かないというのですが、
明日は故郷　尼崎の大覚寺身振り狂言も是非見ておこうと。
能楽から採ったという尼崎ゆかりの「大物之浦」そして壬生狂言で見た「節分厄払い」も演ぜられるので、楽しみ。
是非とも　明日は尼崎の節分へゆこう・・・・・・・・・

2014.2.2.　夕　　神戸への帰り道　いまだ、印象さめやらずで
Mutsu Nakanishi

尼崎で一番古いお寺　大覚寺の節分　2014.2.3.

壬生狂言の流れを汲むと聞く 無言劇「大覚寺身振り狂言」の鑑賞

子供の頃 節分豆まきに何度も連れて行ってもらった故郷尼崎の寺町にある大覚寺
節分には 「がんがらがん ガンガラガン」の鉦と太鼓の音にあわせて、壬生狂言の流れを汲むと聞く
無言の身振り狂言が演じられる。 そして、豆まきと小さな「起き上がりこぼし」のだるま。　みんな遠い昔の記憶。
当時は寒かったなぁ･･･という思いと「がんがらがん ガンガラガン」の音しかおぼえていず、何が演じられたのかも記憶がない。
おそらく、境内をはしりまわって、じつとみていなかったのだろう。
前日 京都壬生寺の節分･壬生狂言を見に行ったので、 今年は是非とも、続けて故郷尼崎の大覚寺狂言も見にゆかねば･･･と。
インターネットで大覚寺狂言のプログラムを確かめて、久しぶりに節分の尼崎寺町の大覚寺へ行きました。

大覚寺の歴史

大覚寺の創建は、推古13年(605年)に長州の浦(現在の大物)に建立された「燈炉堂」が起源と言われています。
本尊は十一面千手観世音菩薩で、漁民や海運業者の信仰を集めていました。
南北朝･室町時代、足利二代将軍義詮が半年間在陣し、大覚寺城として政治・経済・文化・軍事の権力を掌握していました。
正和10年(1315年)に描かれた大覚寺絵図から、建立当時の様子がうかがえます。
1617年(元和3年)戸田氏の尼崎城築城にともない、現在地に移転。 尼崎藩のご祈祷所として、藩主･藩領などの安寧豊楽を祈願してきた。
なお、大覚寺に伝わる56点の、正和2年から天正17年(1313～1589年)に至る間の文書(『大覚寺文書』)は尼崎の中世を今に伝え、兵庫県文化財に指定されている。 また、大覚寺は世阿弥の謡曲「芦狩」の舞台の地でもある

大覚寺身振り狂言

大覚寺文書の中に、1840(天保11)年に「大覚寺身振り狂言」の奉納記録があることを
契機に、幕末から明治に掛けて途絶えていた身振り狂言を復活を望む人たちによって、
京都壬生寺の協力を得て、昭和28年の節分から復活した。



昆布だるま
薄い昆布の着物と紅白の水引をまとった珍しい姿の「起き上がりこぼし」。
「こぶ」の語感が「喜ぶ」に通じめでたいと寺の節分に授与される。
江戸時代に昆布を着物の形に切り、張り子のだるまに着せたのが始まり。
尼崎港には北海道の昆布が大量に荷揚げされ、加工後の切れ端が使われたという。
「厄除けだるま」とも呼ばれ、背中に名前などを書き「身代わり」として1年間神棚にまつり、
無病息災を祈る。

また、この大覚寺は世阿弥の謡曲「芦刈」の舞台の地としても知られる。







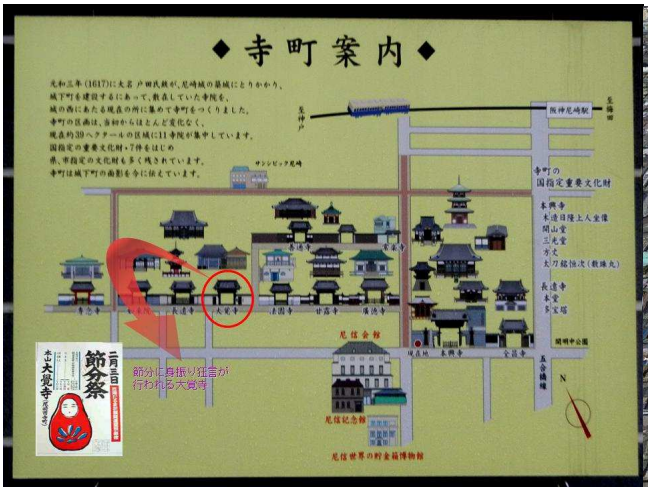














10世紀の「大和物語」を元にした世阿弥の能楽「芦刈」の舞台となった「尼崎」
大物之浦・蘆刈島と大覚寺があった市庭

世阿弥が大和物語に取材した能楽「芦刈」は　故あって妻と別れた男が大物之浦、大覚寺市庭で再会し、幸福になる物語。

貧しさ故に心ならずも夫婦別れをした妻は、京に上り高貴な家の乳母となる。
夫のことが忘れられない妻は、従者を伴って難波の浦へ下り、夫の行方を尋ねるが、夫は零落して居所不明となっていた。
ままならぬ身の上を歎き悲しんでいるところに、芦売りの男がやって来て芦を勧め、笠尽くしの歌を謡って舞う。
その後、男は求められた芦を奥の側へ持って行くと、そこにはかつて別れた妻がいたので、驚き恥じて隠れるが、
妻の呼びかけに和歌を詠み交わし、心もうちとけ、夫婦連れ立って都に帰って行く。

◎「君なくて　あしかりけりと　思ふにそ　いとど難波の浦は住み憂き」
（君は妻　あしかりけりは　悪しと　芦刈　妻と別れて悪かったと思いながら芦を刈る難波の浦の住まいを嘆く歌）
◎「悪しからじ　善からんとてそ　別れにし　何か難波の浦は住み憂き」
（悪くありません　良かれと別れた事で、何か難波の浦が住み憂い事はありません）
大和物語、源平盛衰記、今昔物語等と違い、能「芦刈」では　互に和歌を詠み、夫婦は喜び、共に都へ上ります

難波の浦とは大物之浦　「芦刈島」周辺といわれ、当時この地で一番の賑わいを誇っていた大覚寺の門前町「一庭」(現在の大物)が物語の舞台であるとされる。 大物之浦　猪名川・神崎川河口近くは、繁茂する芦の間に島々が点在する風景は「浦の初島」とも呼ばれ、多くの古歌に詠まれている美しい場所で、古くから都に伝わり、文学にも描かれたとされる。
なお、この物語の舞台難波の浦については、幾つか異説があり、大物之浦のほかにいくつかの候補地がある。



江戸時代の名所案内『摂津名所図会』より
「大和物語」を引いて夫婦の秘話を紹介しながら、
大物あたりの「芦刈島」の様子を描いている。

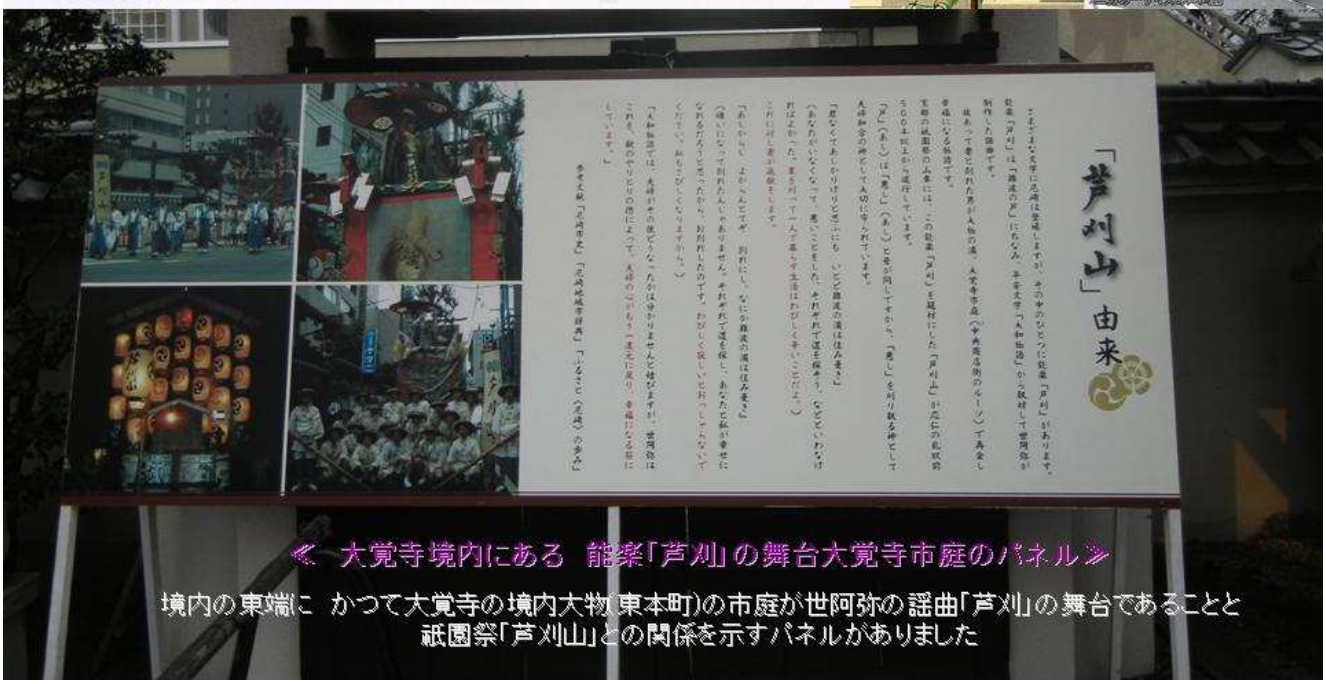


大物之浦　猪名川・神崎川河口近くは、 繁茂する芦の間に島々が点在する美しい風景で「浦の初島」とも呼ばれる。
多くの古歌に詠まれて、古くから都にわり文学にも描かれたとされる。

尼崎大覚寺市庭を舞台にした　能楽「芦刈」を題材にした
京都祇園祭「芦刈山」

大覚寺市庭を舞台にした、平安文学「大和物語」から取材した、世阿弥の能楽「芦刈」を題材にした山車「芦刈山」が、応仁の乱以前から京都祇園祭で巡行している。平成 16 年、財団法人祇園祭山鉾連合会、財団法人芦刈山保存会の協力を得て、京都の祇園祭で巡行する「芦刈山」の二分の一の模型製作に着手し、平成 18 年、尼崎市制 90 年市民パレードでお披露目の巡行をし、平成 19 年から祇園祭に合わせて、尼崎南ロータリークラブや京都芦刈山保存会の協力を得て尼崎中央商店街で巡航披露している。





≪ 大覚寺境内にある　能楽「芦刈」の舞台大覚寺市庭のパネル≫

境内の東端に　かつて大覚寺の境内大物(東本町)の市庭が世阿弥の謡曲「芦刈」の舞台であることと
祇園祭「芦刈山」との関係を示すパネルがありました

尼崎大覚寺 節分「大覚寺　身振り狂言」 2014.2.3.

2月3日　節分にあわせ、大覚寺境内では伝統の大覚寺身振り狂言
尼崎ゆかりの「大物之浦」や節分にちなむ「節分厄払い」など5演目が、途中豆まきもふくめ、2回の計10回演じられた。

午後4時少し前　尼崎に着くと土砂降りの雨で、大覚寺の境内は人影もまばら。
この時間狂言は中止かなぁと思いましたが、小降りの霧雨になって　予定通り「がんがら　ガンガラ」の音にあわせて、お能・謡曲「船弁慶」で知られる尼崎ゆかりの大覚寺身振り狂言「大物之浦」　が始まりました。
しぐさで表現する無言劇ですが、始まりに簡単な筋書き解説があり、ドラマチックな内容が良く理解でき、本当に楽しい。
知ってはいましたが、大物之浦の故事　きっちり付き合ったのは初めて。こんな話だったのだと。その後　節分にあわせての節分豆まきのいわれをユーモラスに描いた「節分厄払い」。

壬生寺で見たのとほぼ同じ内容ですが、楽しく鑑賞。　本当にかぶり尽きで、じっくり見れて　ラッキー。
やっぱり、身振り狂言はお能・歌舞伎そして文楽とも相通じる日本伝統の古典芸能であると共に、
研ぎ澄まされたシンプルな美があると。
狂言が終わった頃には薄暗くなり、境内は豆まきを待つ人で一杯に。　その後、満員になった境内で、節分の豆まきが行われ、幾つか袋に入った豆を受け取り、昆布だるまを受けて　気分ルンルンで帰ってきました。



尼崎 大覚寺 節分「大覚寺　身振り狂言」 大覚寺狂言「大物之浦」 2014.2.3.
有名な大物の浦から船で落ち延びようとする義経・弁慶と静御前の別れの場

大物之浦　&　節分厄払い

	演目とあらすじ	ビデオ(抜粋)	PDF写真帳
大物之浦		 【12:14　77MB】 大覚寺狂言「大物之浦」	 【3MB　26P】 「大物之浦」PDF写真帳
節分厄払い		 【23:09　144MB】 大覚寺狂言「節分厄払い」	 【1MB　20P】 「節分厄払い」PDF写真帳

【参考】
尼崎大覚寺狂言「節分厄払い」と京都壬生狂言「節分」とはほぼ、同じ内容です。
もともと鎌倉時代に京都壬生寺で、仏法をわかりやすく民衆に教えるため、身振り・手ぶり　無言の狂言スタイルで演じた念仏狂言がその始まりといわれる。
尼崎の古刹大覚寺に残る絵図に境内で行われている狂言が描かれている図が見つかり、昭和になって、壬生寺の指導を受けて、「大覚寺身振り狂言」として、復活させたという。

多くの参詣者が訪れる節分には数多くの演目のうち、節分豆まきによる鬼払いの「節分厄払い」が演じられる。
また、尼崎大覚寺では尼崎と関係の深い「大物之浦(船弁慶)」や「橋弁慶」などが、合わせて演じられている。

余談ですが、「節分厄払い」には　節分や大晦日に家々を巡って　目出度い口上を述べて　ユーモラスに　鬼(厄)を払う「厄払い」がでてきますが、大阪落語・東京落語ともに、この「厄払い」を描いた落語が与太郎話として、今も演じられています。

大覚寺身振り狂言　2014.2.3.

大物之浦





平家追討に功績をあげた源義経でしたが、頼朝に疑惑を持たれ、鎌倉方から追われる身となります。
義経は、弁慶や忠実な従者とともに西国へ逃れようと、摂津の国大物の浦へ到着。
義経の愛妾、静(しずか)も一行に伴って同道していましたが、女の身で困難な道のりをこれ以上進むことは難しく、弁慶の進言もあって、都に戻ることになりました。
　別れの宴の席で、静は舞を舞い、義経の未来を祈り、再会を願いながら、涙にくれて義経を見送ります。
静との別れを惜しみ、出発をためらう義経に、弁慶は強引に船出を命じます。

すると、船が海上に出るや否や、突然暴風に見舞われ、波の上に、壇ノ浦で滅亡した平家一門の亡霊が姿を現しました。なかでも総大将であった平知盛(とももり)の怨霊は、
是が非でも義経を
海底に沈めようと、
薙刀を振りかざして
襲いかかります。
弁慶は、数珠をもみ、
必死に五大尊明王に
祈祷します。
その祈りの力によって、
明け方に怨霊は調伏されて彼方の沖に消え、
白波ばかりが残りました。





別れの挨拶をする静御前の冠が頭からパラリと落ちるシーン
義経と静御前の最後の別れを象徴しているという



暴風に見舞われた 波の上、平家の総大将で平知盛の怨霊は、
是が非でも義経を海底に沈めようと、薙刀を振りかざして襲いかかる



薙刀を振りかざして襲いかかる平知盛の怨霊　　弁慶は、数珠をもみ、必死に五大尊明王に祈祷する
その祈りの力によって、明け方に怨霊は調伏されて彼方の沖に消え、　白波ばかりが残りました



薙刀を振りかざして襲いかかる平知盛の怨霊　　弁慶は、数珠をもみ、必死に五大尊明王に祈祷する
その祈りの力によって、明け方に怨霊は調伏されて彼方の沖に消え、　白波ばかりが残りました

大覚寺身振り狂言
節分　厄払い

2014.2.3.









◎「節分　厄払い」　あらすじ

後家さんが節分の用意をしているところに、厄払いが来たあと　鬼が後家に近づきます。
鬼はいろいろ変装するが二度まで失敗します。

三度目に打出の小槌を使って変装して、女の好みの品を取り出して近づいてきます。 後家は大喜び。

鬼とは知らずに欲を出した後家は　小槌が欲しくなり、酒を呑ませて眠らせ、小槌と衣服を剥ぎ取ります。
後家は鬼の正体を見て驚き逃げ出す。

目を覚ました鬼は後を追うが、後家は節分で用意していた豆を投げつけ、鬼は退散する。

この「節分厄払い」は節分に壬生狂言として、京都壬生寺でも奉納されていました。











雨も上がり、薄暗くなった午後5時20分　身振り狂言「節分厄払い」2回目が始まった



厄除けは　鬼払いのまじないをしてかえってゆく
「鶴は千年　亀は万年　東方朔は九千年三浦大介　百六つ　向こうから鬼が来た
私が払いましょう」と唱えて、厄除けのまじない。　豆と銭を貰って帰ってゆく。



後家さんの家に鬼がやってきた
後家さんは　鬼の姿をみて　びっくり仰天　逃げまどう



後家さんに逃げられた鬼は色々策略をめぐらし、蓑と笠をかぶって旅姿に変装して近づくが、
見破られて失敗する



打ち出の小槌で美しい着物や帯を出してもらった後家はんは有頂天



上機嫌で酒を飲みかわすうちに、変装した鬼は酔いつぶれて、眠ってしまいました



後家さんは恐る恐る寝込んだ鬼に近づいて「打ち出の小槌」を取ってしまいます



着物や覆面を取り去って現れた顔は「鬼」 驚く後家の声に目を覚ました鬼が追いかける



後家さんは逃げ惑いながら、鬼の払いな豆の箱を手に取り、豆を鬼に投げつける



鬼は豆まきで追い払われました

「鬼(病気・災厄・貧困など様々な不幸)に負けずに、マメに働くことによってこそ、福徳は得られるものである」

この狂言はこのことを教えた狂言で、 後家が鬼を追っ払った後は、鬼の小槌も着物も消えうせ、
後家はそれが危険な誘惑と悟るとありました。 －インターネットより－





大覚寺　節分のシンボル「昆布だるま」

薄い昆布の着物と紅白の水引をまとった珍しい姿の「起き上がりこぼし」。
「こぶ」の語感が「喜ぶ」に通じめでたいと寺の節分に授与される。
江戸時代に昆布を着物の形に切り、張り子のだるまに着せたのが始まり。

尼崎港には北海道の昆布が大量に荷揚げされ、加工後の切れ端が使われたという。
「厄除けだるま」とも呼ばれ、背中に名前などを書き「身代わり」として1年間神棚にまつり、無病息災を祈る。





今年の節分には念願かなって、京都壬生寺と故郷尼崎の大覚寺の節分狂言を見ることができました。
伝統の身振り念仏狂言　もう忘れかけていましたが、実に新鮮で舞台に引き込まれてしまいました。
古臭いといわずに見てみるのが一番　自分にすっと入って　楽しい時間でした。　また、ひとつ故郷自慢のが増えました













「節分厄払い」後日談　厄払いが後家さんに言う口上



大覚寺や壬生寺で見た身振り狂言「節分厄払い」に出てくる厄払い
後家さんの家にやってきた厄払いが　魚釣り、鶴や亀など目出度い動物の
の真似をして、鬼の厄払いをする。
狂言を見ていて、私はよく知らず、「これはなんや**??**」と不思議やったのですが
帰って調べると　かつて　大晦日・節分には厄払いが各家を巡って、
「鶴は千年、亀は万年、東方朔(とうほうさく)は九千年、
三浦大介(みうらのおおすけ)百六つ、向こうから鬼が来た私が払いましょう」
と　目出度い此の口上で厄をはらって、謝礼をうけたという。
かつては、厄払いが各家を巡ってこれを唱え、謝礼に年の豆と銭を包んだもの
をもらい受けていたが、今では全く見られなくなった。





鶴亀は長寿の生き物。三浦大介は、源頼朝の忠臣三浦義明のことである。
三浦大介は、源頼朝の忠臣三浦義明のことで、源頼朝の運は三浦大介が衣笠城で死に、その族党を頼朝に提供することでひらけた。
三浦一族が衣笠城に立てこもった際に、大介義明は「われらは源氏累代の家来である」として、「生き残って頼朝様を助けろ」と皆を逃がし、わずかな郎党と共に城郭で戦死した・・・。
はるかのち、頼朝は、三浦大介の17回忌が衣笠城で営まれたとき、鎌倉から来て墳墓に拝礼した。
そして「鶴は千年、亀は万年、三浦大介百六つ」の言葉が語り継がれるようになったという。
死んでも　頼朝から碌をもらっている大介は　鶴亀よりもめでたい。享年の89歳に17年を加えた現在(106歳)も生きているという意味だという。

この「厄払い」　米朝の落語を聞いていたら、不意に「厄払い」の話が始まり、上記した口上が出てきて、びっくり。　やっぱり、かつては、厄払いの仕事とこの口上は有名だったようだ。(　落語「厄払い」の落ちに　この口上が使われている)

また、この落語「厄払い」の話は大阪・東京どちらの落語にもあるという。
ご存知の方多いかもしれませんが、次ページにインターネットでみつけたその抜粋です

落語「厄払い」　あらすじ

http://www.niji.or.jp/home/dingo/rakugo2/view.php?file=yakubarai より



めでたい口上で厄をはらう厄払い
2014年壬生狂言「節分」より

頭が年中正月の与太郎。　何をやらせてもダメなので、伯父さん夫婦の悩みの種。
当人に働く気がまるでないのだから、しかたがない。
お袋を泣かしちゃいけないと説教し、「今夜は大晦日だから、厄払いを言い立てて回って、豆とお銭をもらってこい」と言う。
小遣いは別にやるから、売上げはお袋に渡すよう言い聞かせ、
厄落としのセリフを教える。
「あーら　めでたいなめでたいな、
　今晩今宵のご祝儀に、めでたきことにて払おうなら、
　まず一夜明ければ元朝の、門(かど)に松竹、注連(しめ)飾り、床に橙鏡餅、蓬莱山に舞い遊ぶ、
　鶴は千年、亀は万年、東方朔(とうぼうさく)は八千歳、浦島太郎は三千年、三浦の大助百六つ、
　この三長年が集まりて、酒盛りをいたす折からに、悪魔外道が飛んで出で、妨げなさんとするところ、
　この厄払いがかいつかみ、西の海へと思えども、蓬莱山のことなれば、須弥山の方へ、さらありさらり」
というものだが、伯父さんの後について練習しても文句が覚えられないので、紙に書いてもらって出かける。

表通りで「ええ、こんばんは」「何だい」「厄払いで　ござんす」「もう払ったよ」
「もう一ぺん　払いなさい」「何を言やがる！」　　…… 省略 ……
追っ払われて「えー、厄払いのデコデコにめでたいの」と　がなって歩くと、おもしろい厄払いだと、
ある商家に呼び入れられる。　　…… 省略 ……
「おまえは何しに来たんだ」とあきれられ、ようやく「仕事」を思い出す。
　表戸を閉めさせて「原稿」を読みだすが、つっかえ　つっかえで　はかどらない。
「あらあらあら、荒布、あらめうでたいな。あら、めでたいなく」「おい、めでたくなくちゃいけない」
「くの字が大きいんだ。鶴は十年」「鶴は千年だろ」「鶴の孫」「それだって千年だ」
「あ、チョンが隠れてた。鶴は千年。亀は……あの、少々うかがいます」
「どなたで？」「厄払いで」「まだいやがった。何だ」「向こうの酒屋は、何といいます」「萬屋だよ」
「ええ、亀はよろず年。東方」　ここまで読むと、与太郎、めんどうくさくなって逃げ出した。
「おい、表が静かになった。開けてみな」
「へい。あっ、だんな、厄払いが逃げていきます」「逃げていく？　そういや、いま逃亡(＝東方)と言ってた」

参考　大阪落語　米　朝「厄除け」　youtube　http://www.youtube.com/watch?v=XzlOlxjHKXA
　　東京落語　小三治「厄除け」　youtube　http://www.youtube.com/watch?v=vKh8GLguepQ

2014年 節分の鬼 《スライド動画》 京都壬生寺・尼崎大覚寺に伝承されてきた節分会

壬生狂言・大覚寺身振り狂言 2014.2.2. & 2.3.

笛・鉦・太鼓のお囃子のリズムに合わせて繰り広げられる身振り・手ぶりの無言劇

2014年の鬼 スライド写真集



節分・立春もすぎましたが、南岸低気圧の来襲で大雪に見舞われるなど、2月は寒い「春待ち」の時節です。毎年出会いに行く「節分の鬼」今年も出会いに。
前々から、一度行きたかった私の故郷 尼崎の大覚寺に伝えられてきた節分の行事 大覚寺身振り狂言の「鬼」を見に行こうと。
また、この大覚寺身振り狂言の元になった京都壬生寺 壬生狂言の節分の鬼。
2月2日京都壬生寺 2月3日節分 尼崎大覚寺の節分祭に行ってきました。

「どんがらがん ドンガラガン」鉦と太鼓・笛の囃子のリズムに頭の奥のかすかな記憶がなつかしく、合わせて演じられる無言劇も本当に新鮮で楽しい時間でした。
久しぶりに厄払いされる方の鬼を見てきました。

まったくの私の興味 またのふるさと自慢のスライド動画になってしまいました。
節分会の様子ならびに身振り狂言の演目の詳細などはスライド動画の下側にある 節分会と狂言の紹介ビデオ(抜粋)の PDF file ならびにをご覧ください

大物之浦 & 節分厄払い

	演目とあらすじ	ビデオ(抜粋)	PDF写真帳
大物之浦		 【12:14 77MB】 大覚寺狂言「大物之浦」	 【3MB 26P】 「大物之浦」PDF写真帳
節分厄払い		 【23:09 144MB】 大覚寺狂言「節分厄払い」	 【1MB 20P】 「節分厄払い」PDF写真帳

【参考】
尼崎大覚寺狂言「節分厄払い」と京都壬生狂言「節分」とはほぼ、同じ内容です。
もともと鎌倉時代に京都壬生寺で、仏法をわかりやすく民衆に教えるため、身振り・手ぶり 無言の狂言スタイルで演じた念仏狂言がその始まりといわれる。
尼崎の古刹大覚寺に残る絵図に境内で行われている狂言が描かれている図が見つかり、昭和になって、壬生寺の指導を受けて、「大覚寺身振り狂言」として、復活させたという。

多くの参詣者が訪れる節分には数多くの演目のうち、節分豆まきによる鬼払いの「節分厄払い」が演じられる。
また、尼崎大覚寺では尼崎と関係の深い「大物之浦(船弁慶)」や「橋弁慶」などが、合わせて演じられている。

余談ですが、「節分厄払い」には 節分や大晦日に家々を巡って 目出度い口上を述べて ユーモラスに 鬼(厄)を払う「厄払い」がでてきますが、大阪落語・東京落語ともに、この「厄払い」を描いた落語が与太郎話として、今も演じられています。

2014年節分の「鬼」

2014年節分　京都壬生寺・尼崎大覚寺に伝承されてきた身振り手振りの狂言
壬生狂言「節分」ならびに大覚寺身振り狂言「節分厄払い」を鑑賞　2014. 2.2. & 2.3.

節分の前日　京都壬生寺では節分大法会が始まり、壬生寺境内の大念仏堂では　2月2日と節分の2月3日身振り手振りの壬生狂言が行われ、壬生狂言「節分」が演じられる。一度見たことがあるのですが、ほとんど記憶がない壬生狂言。
今年の節分　節分の「鬼」は　是非　この壬生狂言の「鬼」を見たいと家内と二人で壬生寺に出かけました。
また、私の故郷尼崎の大覚寺でも、この壬生狂言の流れを汲む大覚寺身振り狂言が伝承されていて、
節分には　同じ節分の「鬼」おり、こちらも　是非　見たくて、翌日の節分には、大覚寺身振り狂言も見に行ってきました。

もう　ほとんど忘れかけていた壬生狂言の節分の「鬼」。
でも　鉦と太鼓の囃子に乗って演じられる無言劇。「がんがらがん　ガンガラガン」の響きが始まると　舞台にひきつけられて、
40分ほどの狂言が、実に新鮮で、楽しい時間。ほとんど記憶がない音の響きでしたが、聞こえてくると
どこかで　聞いたことのある何とはなしになつかしいリズム。　これが日本人の心を呼び覚ますリズムのように思いました。

◆ 2014.2.2.　京都　壬生寺　節分大法会　大念仏堂　壬生狂言「節分」
◆ 2014.2.3.　尼崎　大覚寺　節分祭　　能楽堂　　身振り狂言「大物之浦」
　　尼崎　大覚寺　節分祭り　　能楽堂　　身振り狂言「節分厄払い」

壬生狂言「節分」＆　大覚寺身振り狂言「節分厄払いのあらすじ
演目が違っていますが、演じられた狂言の身振り・しぐさもほぼおなじでした

後家さんが節分の用意をしているところに、厄払いが来たあと　鬼が後家に近づきます。
鬼はいろいろ変装するが二度まで失敗します。
三度目に打出の小槌を使って変装して、女の好みの品を取り出して近づいてきます。 後家は大喜び。
鬼とは知らずに欲を出した後家は　小槌が欲しくなり、酒を呑ませて眠らせ、小槌と衣服を剥ぎ取ります。
後家は鬼の正体を見て驚き逃げ出す。

目を覚ました鬼は後を追うが、後家は節分で用意していた豆を投げつけ、鬼は退散する。

京都　壬生寺の節分会　壬生狂言「節分」を見にゆく 2014.2.2.



京都　壬生寺　節分会の賑わい　2014.2.2.


京都壬生寺　壬生狂言「節分」：節分の豆まきの徳をユーモラスに見せる無言劇
2014.2.2.　壬生寺大念仏堂で

京都　壬生寺　節分会　壬生狂言「節分」鑑賞　2014.2.2.

もう　ほとんど忘れかけていた壬生狂言。　でも　鉦と太鼓の「がんがらがん　ガンガラガン」の響きにひきつけられて、
舞台に見入っていました。　40分ほどの狂言が実に新鮮で、楽しい時間でした。

今から700年前の鎌倉時代に始まった壬生狂言。　群衆を前にして最もわかりやすい方法で仏の教えを説こうとして、
身ぶり手ぶりのパントマイム(無言劇)に仕組んだ時衆融通(じしゅうゆうづう)念佛を考えついたのが、壬生狂言の始まりと聞く。

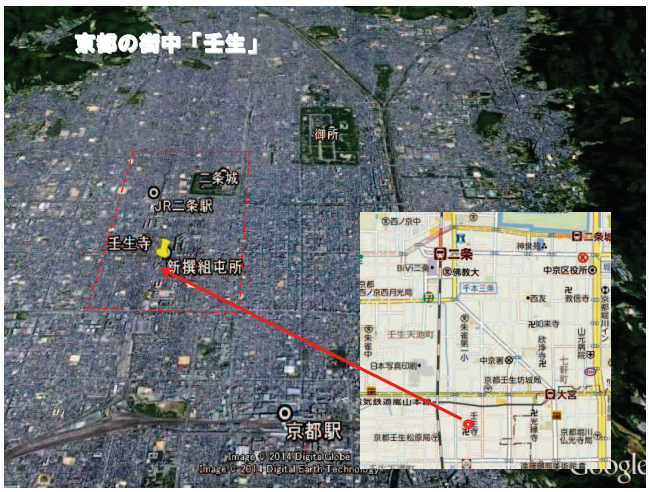
鉦と太鼓と笛が楽でゆっくりしたリズムに合わせて、身振り・しぐさで表現して演じる無言の仮面劇。
学生時代に一度見たはずなのですが、まったく記憶なし。
私の故郷尼崎にもこの狂言が残っていて、記憶はごっちゃになっています。
京都では「壬生さんのガンデンデン」というのだそうですが、
私には、薄暗闇の寒い冬の境内に響き渡る「がんがらがん　ガンガラガン」の響きだけが頭に残っています。

簡単な筋立てと身振りで内容がわかるので、40分ほどですが、狂言に引き込まれて、見ていて楽しい。
1時間弱の中に甲斐があり、楽しい節分　今年も「鬼」に出会えて　よかったです。
壬生狂言でもうひとつ有名な「かわらけ割り」も是非見たかったのですが、4月の壬生狂言の機会に。

遠い記憶で　リズムが覚えていませんが、何とはなしになつかしいリズムでした。
また　新撰組に屯所を置いた壬生寺へいったのですが、「壬生」は古くから続く京都街中。
京都は碁盤の目と言いますが、その井目の中は路地が入り組んだ、狭い道の両側に町家がびっしり。
これも　日頃車の行き交う広い道に慣れた私には本当に新鮮。　また、壬生は今に続く京都の街中とつくづく思いました。
機会あれば　是非一度、京の町中探検に壬生へ。

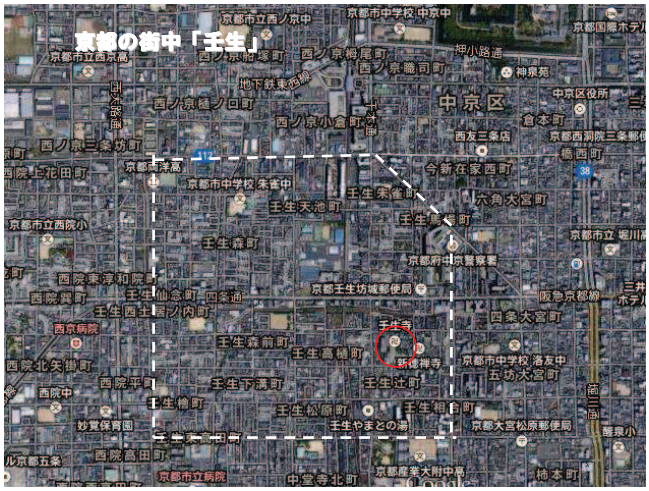
家内はイメージが変わるのがいやで、行かないというのですが、
明日は節分　尼崎の大覚寺身振り狂言も是非見ておこう。
能楽堂から見たという尼崎の松の緑と　大覚寺濠、そして壬生狂言で見た「節分厄払い」も演ぜられるので、楽しみ。
是非とも　明日は尼崎の節分へ行こう。

2014.2.2.　夕　　神戸への帰り道　いまだ　印象さめやらずで
Mutsu Nakanishi





壬生寺は二条城の南約1km。びっしり町家が詰まった壬生の街中にある。 新撰組が屯所を置いた場所。 京都は碁盤の目で仕切られているとはいえ、街中の碁盤の目の中は　今も路地が連なる細い道の両側にびっしり家並みが連なっている。
この家並みの中を歩くと、この壬生の地が江戸時代　京都の中心市街地の一部であったことを強く感じる。

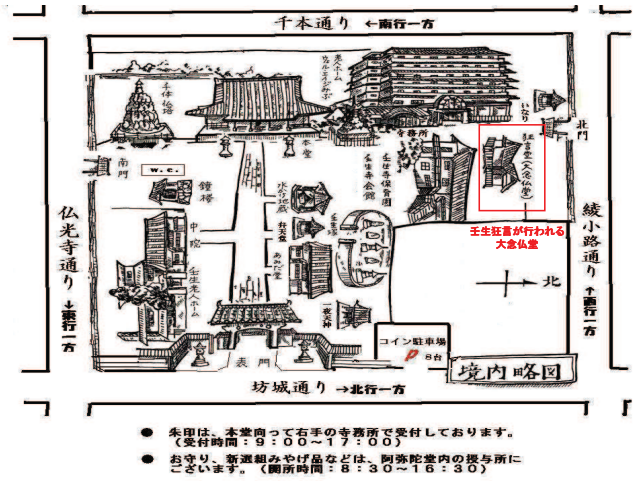







壬生寺への道　四条坊城の角　元祇園梛神社前で　　で　2014.2.2.


壬生寺へ向かう狭い坊城通りには　露店がびっしり。節分のお参りで人があふれていました
壬生寺への道　坊城通りで　2014.2.2.



● 朱印は、本堂向って右手の寺務所で受付しております。
（受付時間：９：００～１７：００）
● お守り、新選組みやげ品などは、阿弥陀堂内の授与所にございます。（開所時間：８：３０～１６：３０）



壬生寺　表門前　2014.2.2.


壬生寺の境内　　壬生寺節分会　2014.2.2.



壬生狂言「ほうらく割り」でも有名な壬生寺
厄除けほうらくを求める人で　境内の露店には人があふれていました　2014.2.2.

壬生寺境内で節分に求め、奉納する「かわらけ」

壬生狂言　「炮烙割り」 壬生寺ホームページより　http://www.mibudera.com/kyougen.htm



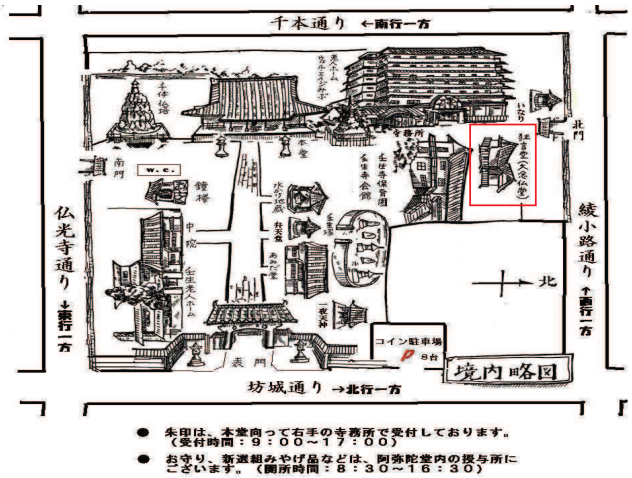
毎年４月の春の壬生狂言、９日間の公開中、毎日の序曲として演じられる。
京都では２月の節分に壬生寺に参詣して、素焼きの炮烙(ほうろくとも呼ぶ)を境内で求め、家内一同の年齢、性別を書き、寺に奉納するという風習が古くからある。

これらの奉納された多数の炮烙をこの狂言で割る。
奉納者は厄除開運が得られるという信仰がある。





厄除けの「ほうらくわり」でも有名な壬生寺
節分の壬生寺に奉納する厄除け「かわらけ」を求める参詣の人たち　2014.2.2.



- 朱印は、本堂向って右手の寺務所で受付しております。（受付時間：9：00～17：00）
- お守り、数珠組みやげ品などは、阿弥陀堂内の授与所にございます。（開所時間：8：30～16：30）



壬生寺　本堂　2014.2.2.



壬生寺　本堂　2014.2.2.



人でびっしりの本堂前広場では　山伏のみなさんにより護摩が焚かれていました　2014.2.2.



本堂前広場の北側にある大念仏堂で行われている壬生狂言を見るために長い行列　約1時間ほど待って、大念仏堂へ向かうことができました。
やっぱり　すごい人出でした　　2014.2.2.

ロープが張られ、　正面に見えているのは、壬生寺の保育園　この建物の向こう側に壬生狂言がある大念仏堂があり、狂言を見る人は行列で、広い正面階段を上り、この建物を通りぬけ、大念仏堂へゆくシステムになっている。





大念仏堂への階段上から　壬生狂言に並ぶ行列　2014.2.2.



身振り手振りで表現する無言劇　壬生狂言「節分」を待つ大念仏堂　2014.2.2.
南の保育園側に設けられた観客席はぴっしり満員

壬生狂言「節分」が始まりました　2012.2.2.

壬生寺ホームページより　http://www.mibudera.com/kyougen.htm

壬生狂言「節分」＆大覚寺身振り狂言「節分厄払い」のあらすじ

後家さんが節分の用意をしているところに、厄払いが来たあと 鬼が後家に近づきます。
鬼はいろいろ変装するが二度まで失敗します。
三度目に打出の小槌を使って変装して、女の好みの品を取り出して近づいてきます。後家は大喜び。
鬼とは知らずに欲を出した後家は 小槌が欲しくなり、酒を呑ませて眠らせ、小槌と衣服を剥ぎ取ります。
後家は鬼の正体を見て驚き逃げ出す。
目を覚ました鬼は後を追うが、後家は節分で用意していた豆を投げつけ、鬼は退散する。

**「鬼（病気、災厄や貧困など様々な不幸）を招く甘い誘惑に負けずに、
マメ(まじめに、こつこつ)に働くことによってこそ、福徳は得られるものである」この事を教えた狂言で、
後家が鬼を追っ払った後は、鬼の小槌や着物も消え失せ、
後家はそれが危険な誘惑であったと悟るのである。**



壬生狂言 「節分」

壬生寺ホームページより　http://www.mibudera.com/kyougen.htm

この狂言は「鬼（病気、災厄や貧困など様々な不幸）を招く甘い誘惑に負けずに、
マメ(まじめに、こつこつ)に働くことによってこそ、福徳は得られるものである」
ことを教えた狂言で、
後家が鬼を追っ払った後は、鬼の小槌や着物も消え失せ、後家はそれが危険な
誘惑であったと悟るのである。

節分とは、本来、季節の分かれ目という意味で一年に四回もあるが、
一般にいう節分の日とは2月の立春の前日をいう。
この日の夜、鬼が嫌うという豆を「福は内、鬼は外」と唱えながらまいて、
鬼を追い払うという習慣がある。
毎年2月の壬生寺節分会は、寺の最大行事で、
十数万人もの参詣人で賑わうが、
この壬生狂言の『節分』を節分会に繰返し上演して、
参詣人の厄除招福を祈願している。



壬生狂言「節分」の狂言の詳細は 翌日の2月3日節分に 見に出かけた私の故郷 尼崎の大覚寺に伝わる 壬生狂言と同じ流れをくむ 尼崎大覚寺の身振り狂言「節分厄払い」を参照ください　Mutsu Nakanishi



学生時代にも一度見た記憶があるのですが、まったく覚えていない
残念ながら撮影禁止。 是だけの人出ならば、致し方のないところ
一番後ろに座って ちょこっとだけ デジカメ使わせてもらいました



鬼が怖い 後家さん やってきた厄払いに頼んで「厄払い」
厄払いが目出度い口上を並べたて、「厄払い」をして帰ってゆく



厄払いが帰った後に鬼が現れ、後家さんに取り入ろうとする



変装した鬼が小槌からだした着物などに大喜びの後家さん
酒を飲ませて眠らせ、小槌を取る。 鬼の変装をはずして、正体が鬼と知って びっくり 逃げまわる。



鬼の嫌いな豆を投げつけ、ようやく鬼を退散させる



京都　壬生寺　節分会　壬生狂言「節分」鑑賞　2014.2.2.

もう　ほとんど忘れかけていた壬生狂言。　でも　鉦と太鼓の「がんがらがん　ガンガラガン」の響きにひきつけられて、
舞台に見入っていました。　40分ほどの狂言が実に新鮮で、楽しい時間でした。

今から700年前の鎌倉時代に始まった壬生狂言　　群衆を前にして最もわかりやすい方法で仏の教えを説こうとして、
身ぶり手ぶりのパントマイム(無言劇)に仕組んだ時衆融通(じさいゆうづう)念佛を考え出したのが、壬生狂言の始まりと聞く。

鉦と太鼓と笛が奏でるゆっくりしたリズムに合わせて、身振り・しぐさで表現して演じる無言の仮面劇。
学生時代に一度見たはずなのですが、まったく記憶なし。
私の故郷尼崎にもこの狂言が残っていて、　記憶はどっちゃになっています。
京都では「壬生さんのカンデンデン」というのだそうですが、
私には　薄暗闇の寒い寺の境内に響き渡る「がんがらがん　ガンガラガン」の響きだけが頭に残っています。

簡単な前ぢ、身振りで内容が判かるので、40分ほどですが、狂言に引き込まれて、見ていて楽しい。
1時間ほどの準備中も寒い節分　　今年も「鬼」は会えずじまいです。
壬生狂言でもうひとつ考えが　かわらけ割りも是非見たかったのですが、4月の壬生狂言の機会に。

遠い記憶でリズムが覚えていませんが、何となくなつかしいリズムでした。
ふと、一度駅前に確定造りで壬生寺へいったのですが、「壬生」は古くから続く京都街中。
京都は迷路の目と言いますが、その井目の中は路地が入り組んだ、狭い道の両側に町家がびっしり。
これも　日頃車の行き交う広い道に慣れた私には本当に新鮮。　また、壬生は今に続く京都の街中とつくづく思いました。
機会あれば　是非一度、京の町中探検に壬生へ

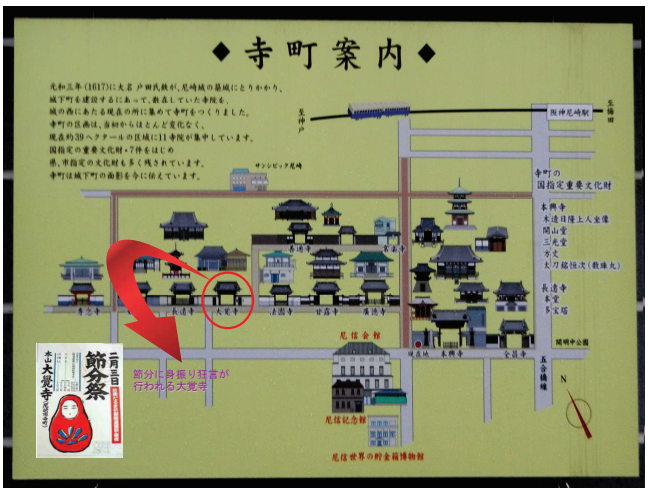
家内はイメージが変わるのがいやで、行かないというのですが、
明日は故郷「尼崎の大覚寺身振り狂言も是非見ておこう。
能楽から採ったという記載があり「大般若」そして壬生狂言で見た「節分瓦払い」も演ぜられるので、楽しみ。
是非とも、明日は尼崎の節分へゆこう。　豆まきで　鬼は外　福は内

2014.2.2.　夕　　神戸への帰り道　いまだ印象さめやらずで
Mutsu Nakanishi













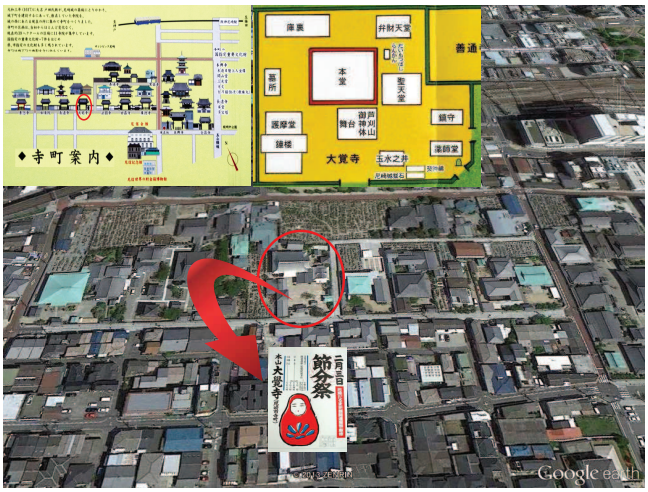


節分・身振り狂言が行われる大覚寺寺町界隈　20014.2.3.



節分・身振り狂言が行われる寺町大覚寺の塀　20014.2.3.











境内では土砂降りの中、午後の豆まきの最中　豆まきのあと午後の身振り狂言が再開される。
演目は「大権之浦」と「節分厄払い」　2014.2.3.



大覚寺境内　本堂と能舞台　あいにくの土砂降り　豆まきが終わって、人影がなくなる　2014.2.3






10世紀の「大和物語」を元にした世阿弥の能楽「芦刈」の舞台となった「尼崎」
大物之浦・蘆刈島と大覚寺があった市庭

世阿弥が大和物語に取材した能楽「芦刈」は　故あって妻と別れた男が大物之浦、大覚寺市庭で再会し、幸福になる物語。

貧しさ故に心ならずも夫婦別れをした妻は、京に上り高貴な家の乳母となる。
夫のことが忘れられない妻は、従者を伴って難波の浦へ下り、夫の行方を尋ねるが、夫は零落して居所不明となっていた。
ままならぬ身の上を歎き悲しんでいるところに、芦売りの男がやって来て芦を勧め、笠尽くしの歌を謳って舞う。
その後、男は求められた芦を奥の側へ持って行くと、そこにはかつて別れた妻がいたので、驚き恥じて隠れるが、
妻の呼びかけに和歌を詠み交わし、心もうちとけ、夫婦連れ立って都に帰って行く。

❶「君なくて　あしかりけりと　思ふにぞ　いとど難波の浦は住み憂き」
（君は妻　あしかりけりは　悪しと　芦刈　妻と別れて悪かったと思いながら芦を刈る難波の浦の住まいを嘆く歌）
❷「悪しからじ　昔からんとてぞ　別れにし　何か難波の浦は住み憂き」
（悪くありません　良かれと別れた事で、何か難波の浦が住み憂い事はありませぬ）
大和物語、源平盛衰記、今昔物語等と違い、能「芦刈」では　互に和歌を詠み、夫婦は喜び、共に都へ上ります

難波の浦とは大物之浦「芦刈島」周辺といわれ、当時この地で一番の賑わいを誇っていた大覚寺の門前町「一庭」(現在の大物)が物語の舞台であるとされる。 大物之浦　猪名川・神崎川河口近くは、繁茂する芦の間に島々が点在する風景は「浦の初島」とも呼ばれ、多くの古歌に詠まれている美しい場所で、古くから都に伝わり、文学にも描かれたとされる。
なお、この物語の舞台難波の浦については、幾つか異説があり、大物之浦のほかにいくつかの候補地がある。

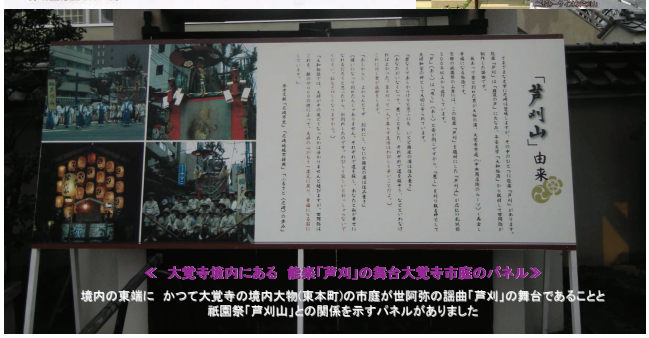

江戸時代の名所案内「摂津名所図会」より
「大和物語」を引いて夫婦の秘話を紹介しながら、
大物あたりの「芦刈島」の様子を描いている。


大物之浦　猪名川・神崎川河口近くは、 繁茂する芦の間に島々が点在する美しい風景で「浦の初島」とも呼ばれる。
多くの古歌に詠まれて、古くから都にわり文学にも描かれたとされる。

尼崎大覚寺市庭を舞台にした　能楽「芦刈」を題材にした

京都祇園祭「芦刈山」

大覚寺市庭を舞台にした、平安文学「大和物語」から取材した、世阿弥の能楽「芦刈」を題材にした山車「芦刈山」が、応仁の乱以前から京都祇園祭で巡行している。平成 16 年、財団法人祇園祭山鉾連合会、財団法人芦刈山保存会の協力を得て、京都の祇園祭で巡行する「芦刈山」の二分の一の模型製作に着手し、平成 18 年、尼崎市制 90 年市民パレードでお披露目の巡行をし、平成 19 年から祇園祭に合わせて、尼崎南ロータリークラブや京都芦刈山保存会の協力を得て尼崎中央商店街で巡航披露している。

＜ 大覚寺境内にある 能楽「芦刈」の舞台大覚寺市庭のパネル ＞
境内の東端に　かつて大覚寺の境内大物(東本町)の市庭が世阿弥の謡曲「芦刈」の舞台であることと
祇園祭「芦刈山」との関係を示すパネルがありました

尼崎大覚寺 節分「大覚寺　身振り狂言」 2014.2.3.

2月3日　節分にあわせ、大覚寺境内では伝統の大覚寺身振り狂言
尼崎ゆかりの「船弁慶」や節分にちなむ「節分厄払い」など5演目が、途中豆まきもふくめ、2回の計10回演じられた。

午後4時少し前　 尼崎に着くと土砂降りの雨で、大覚寺の境内は人影もまばら。
この時間狂言は中止かなぁと思いましたが、小降りの霧雨になって　予定通り「がんがら　ガンガラ」の音にあわせて、お能・謡曲「船弁慶」で知られる尼崎ゆかりの大覚寺身振り狂言「大物之浦」　が始まりました。
しぐさで表現する無言劇ですが、始まりに簡単な筋書き解説があり、ドラマチックな内容が良く理解でき、本当に楽しい。
知ってはいましたが、大物之浦の故事　きっちり付き合ったのは初めて。こんな話だったのだと。その後　節分にあわせての節分豆まきのいわれをユーモラスに描いた「節分厄払い」。

壬生寺で見たのとほぼ同じ内容ですが、楽しく鑑賞。　本当にかぶり尽きて、じっくり見れて　ラッキー。
やっぱり、身振り狂言はお能・歌舞伎そして文楽とも相通じる日本伝統の古典芸能であると共に、
研ぎ澄まされたシンプルな美があると。
狂言が終わった頃には薄暗くなり、境内は豆まきを待つ人で一杯に。　その後、満員になった境内で、節分の豆まきが行われ、幾つか袋に入った豆を受け取り、昆布だるまを受けて　気分ルンルンで帰ってきました。


尼崎 大覚寺 節分「大覚寺　身振り狂言」 大覚寺狂言「大物之浦」 2014.2.3.
有名な大物の浦から船で落ち延びようとする義経・弁慶と静御前の別れの場

尼崎大覚寺 節分「大覚寺　身振り狂言」 2014.2.3.

壬生狂言の流れを汲むと聞く 無言劇「大覚寺身振り狂言」の演目

16：00	・・・・・・・	豆まき
16：30	・・・・・・・	『大物之浦』　2回目・50分
17：20	・・・・・・・	『節分厄払』　2回目・40分
18：00	・・・・・・・	豆まき

小降りの霧雨になって　予定通り「がんがら　ガンガラ」の音にあわせて、お能・謡曲「船弁慶」で知られる尼崎ゆかりの大覚寺身振り狂言「大物之浦」　が始まりました。
しぐさで表現する無言劇ですが、始まりに簡単な筋書き解説があり、ドラマチックな内容が良く理解でき、本当に楽しい。


尼崎 大覚寺 節分「大覚寺　身振り狂言」 大覚寺狂言「大物之浦」 2014.2.3.
有名な大物の浦から船で落ち延びようとする義経・弁慶と静御前の別れの場

「大覚寺　身振り狂言」 2014.2.3.

「大物之浦」　❷「節分　厄払い」

❶「大物之浦」
義経が大物浦から九州へ落ち延びるため、船出しようとしたが、嵐で難破し、吹き戻された史実を題材にしたお能・謡曲「船弁慶」で知られる尼崎ゆかりの狂言。
頼朝に疑われ、西国へ船で逃れるため、尼崎大物之浦にやってきた義経・弁慶一行。 船出を前に、「私も連れて行って欲しい」とせがむ静御前に「女連れは難しい」といい含め、静御前は涙ながら最後の別れの舞を舞う。
義経・弁慶一行が船出すると、にわかに空は掻き曇り、風も出て大嵐。現れたのは、壇ノ浦で討たれた平知盛の怨霊。
弁慶が数珠をもみつつお経をあげて、一心に祈ると祈りが通じたのか、怨霊は静かに去って静かな海に。

❷「節分　厄払い」
後家さんが節分の用意をしているところに、厄払いが来たあと　鬼が後家に近づきます。
鬼はいろいろ変装するが二度まで失敗します。三度目に打出の小槌を使って変装して、
女の好みの品を取り出して近づいてきます。後家は大喜び。
鬼とは知らずに欲を出した後家は　小槌が欲しくなり、酒を呑ませて眠らせ、小槌と衣服を剥ぎ取ります。
後家は鬼の正体を見て驚き逃げ出す。
目を覚ました鬼は後を追うが、後家は節分で用意していた豆を投げつけ、鬼は退散する。
この「節分厄払い」は節分に壬生狂言として、壬生寺でも奉納されていました。


尼崎 大覚寺 節分「大覚寺　身振り狂言」 大覚寺狂言「大物之浦」 2014.2.3.
有名な大物の浦から船で落ち延びようとする義経・弁慶と静御前の別れの場

大覚寺身振り狂言　2014.2.3.
大物之浦




平家追討に功績をあげた源義経でしたが、頼朝に疑惑を持たれ、鎌倉方から追われる身となります。
義経は、弁慶や忠実な従者とともに西国へ逃れようと、摂津の国大物の浦へ到着。
義経の愛妾、静(しずか)も一行に伴って同道していましたが、女の身で困難な道のりをこれ以上進むことは難しく、弁慶の進言もあって、都に戻ることになりました。
　別れの宴の席で、静は舞を舞い、義経の未来を祈り、再会を願いながら、涙にくれて義経を見送ります。
静との別れを惜しみ、出発をためらう義経に、弁慶は強引に船出を命じます。


すると、船が海上に出るや否や、突然暴風に見舞われ、波の上に、壇ノ浦で滅亡した平家一門の亡霊が姿を現しました。なかでも総大将であった平知盛(とももり)の怨霊は、是が非でも義経を海底に沈めようと、薙刀を振りかざして襲いかかります。
弁慶は、数珠をもみ、必死に五大尊明王に祈祷します。
その祈りの力によって、明け方に怨霊は調伏されて彼方の沖に消え、白波ばかりが残りました。



❷「大物之浦」 あらすじ

義経が大物浦から九州へ落ち延びるため、船出しようとしたが、嵐で難破し、吹き戻された史実を題材にしたお能・謡曲「船弁慶」で知られる尼崎ゆかりの狂言。
頼朝に疑われ、西国へ船で逃れるため、尼崎大物之浦にやってきた義経・弁慶一行。船出を前に、「私も連れて行って欲しい」とせがむ静御前に「女連れは難しい」といい含め、静御前は涙ながら最後の別れの舞を舞う。
義経・弁慶一行が船出すると、にわかに空は掻き曇り、
風も出て大嵐。現れたのは、壇ノ浦で討たれた平知盛の怨霊。
弁慶が数珠をもみつつ、お経をあげて、一心に祈ると祈りが通じたのか、怨霊は静かに去って静かな海に。

尼崎 大覚寺狂言「大物之浦」 2014.2.3.
有名な大物の浦から　船で落ち延びようとする義経・弁慶と静御前の別れの場
謡曲「船弁慶」をもとにした大覚寺身振り狂言「大物之浦」より



かんがら　ガンガン　鉦と鼓が境内にない弘き　尼崎節分の伝統行事　大覚寺身振り狂言「大物之浦」の始まりです。
平家追討に功績をあげた源義経でしたが、頼朝に疑惑を持たれ、鎌倉方から追われる身となります。
義経は、弁慶や忠実な従者とともに西国へ逃れようと、摂津の国大物の浦へ



義経は、弁慶や忠実な従者とともに西国へ逃れようと、摂津の国大物の浦へ
義経の愛妾、静（しずか）は、一行に伴って同道していましたが、
女の身で困難な道のりを　これ以上進むことは難しく、弁慶の進言もあって、都に戻ることに



義経は、弁慶や忠実な従者とともに西国へ逃れようと、摂津の国大物の浦へ
大物之浦へ　船を向けよう



義経は、弁慶や忠実な従者とともに西国へ逃れようと、摂津の国大物の浦へ
船頭を呼んで　大物之浦へ　船を向けさせよう」



義経は、弁慶や忠実な従者とともに西国へ逃れようと、摂津の国大物の浦へ
「船頭よ　いざ　大物之浦へ　船を向けよ」



義経・弁慶一行はまもなく摂津の国大物の浦に到着し、船頭は湊に錨をおろす
そして、同行していた静御前を義経の前へ召出す



摂津の国大物の浦へ到着した一行　義経は 弁慶の進言もあって
「女の身で　困難な道のりをこれ以上進むことは難しい」と静御前に伝える
同道していた静御前は　泣く泣く都に戻ることに



義経の説得に　泣く泣く了承する静御前
それを立ちあがって聞き、ほっとする弁慶　今宵は別れの宴を



今宵　別れの宴を支持する弁慶



摂津の国大物の浦へ到着した一行
泣く泣く都に帰ることになった静御前と　宴席を開いて　再会を願いつつ、義経と別れの酒を酌み交わす



摂津の国大物の浦へ到着した一行
泣く泣く都に帰ることになった静御前と　宴席を開いて　再会を願いつつ、義経と別れの酒を酌み交わす



摂津の国大物の浦へ到着した一行
泣く泣く都に帰ることになった静御前と　宴席を開いて　再会を願いつつ、義経と別れの酒を酌み交わす



摂津の国大物の浦へ到着した一行
泣く泣く都に帰ることになった静御前と　宴席を開いて　再会を願いつつ、義経と別れの酒を酌み交わす



摂津の国大物の浦へ到着した一行
都に帰ることになった静御前　悲しみをこらえつつ、別れの舞を舞い
義経の未来を祈り、再会を願いつつ、　船から去ってゆく



摂津の国大物の浦へ到着した一行
都に帰ることになった静御前　悲しみをこらえつつ、別れの舞を舞い
義経の未来を祈り、再会を願いつつ、　船から去ってゆく



別れの挨拶をして　船から降りる静御前の冠が頭からパラリと落ちるシーン
義経と静御前の最後の別れを象徴しているという



別れの挨拶をする静御前の冠が頭からパラリと落ちるシーン
義経と静御前の最後の別れを象徴しているという



静御前が船を降りて去った後、船の準備を整え、潮も良し
静との別れに未練を残しつつ、義経・弁慶一行は　大物之浦の湊を　漕ぎ出してゆく



船の準備を整え、潮も良し
静との別れに未練を残しつつ、義経・弁慶一行は　大物之浦の湊を　漕ぎ出してゆく



船が海上に出るや否や、突然 天候が急変　　これはどうしたこと
暴風に見舞われ、　波の上に、壇ノ浦で滅亡した平家一門の亡霊が姿を現します



暴風に見舞われた 波の上、平家の総大将で平知盛の怨霊は、
是が非でも義経を海底に沈めようと、薙刀を振りかざして襲いかかる



暴風に見舞われた 波の上、平家の総大将で平知盛の怨霊は、
是が非でも義経を海底に沈めようと、薙刀を振りかざして襲いかかる



暴風に見舞われた 波の上、平家の総大将で平知盛の怨霊は、
是が非でも義経を海底に沈めようと、薙刀を振りかざして襲いかかる



薙刀を振りかざして襲いかかる平知盛の怨霊　　弁慶は、数珠をもみ、必死に五大尊明王に祈祷する
その祈りの力によって、明け方に怨霊は調伏されて彼方の沖に消え、　白波ばかりが残りました



薙刀を振りかざして襲いかかる平知盛の怨霊　　弁慶は、数珠をもみ、必死に五大尊明王に祈祷する
その祈りの力によって、明け方に怨霊は調伏されて彼方の沖に消え、 白波ばかりが残りました



薙刀を振りかざして襲いかかる平知盛の怨霊　　弁慶は、数珠をもみ、必死に五大尊明王に祈祷する
その祈りの力によって、明け方に怨霊は調伏されて彼方の沖に消え、 白波ばかりが残りました



薙刀を振りかざして襲いかかる平知盛の怨霊　　弁慶は、数珠をもみ、必死に五大尊明王に祈祷する
その祈りの力によって、明け方に怨霊は調伏されて彼方の沖に消え、 白波ばかりが残りました



大覚寺身振り狂言
大物之浦
2014.2.3.
【 おしまい 】



◎「大物之浦」 あらすじ

頼朝に疑われ、西国へ船で逃れるため、尼崎大物之浦にやってきた義経・弁慶一行。船出を前に、「私も連れて行って欲しい」とせがむ静御前に「女連れは難しい」といい含め、静御前は涙ながら最後の別れの舞を舞う。
義経・弁慶一行が船出すると、にわかに空は掻き曇り、風も出て大嵐。現れたのは、壇ノ浦で討たれた平知盛の怨霊。
弁慶が数珠をもみつつ、お経をあげて、一心に祈ると祈りが通じたのか、怨霊は静かに去って静かな海に。
事前に筋書き解説があり、よく知った話なので、「がんがら　ガンガン」と鉦と太鼓に合わせて、身振り・しぐさだけで進む無言劇すっかり引き込まれていました。



謡曲「船弁慶」をもとにした大覚寺身振り狂言「大物之浦」より

「大覚寺　身振り狂言」2014.2.3.
◎「節分　厄払い」

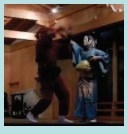


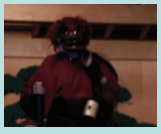
壬生狂言と同じ流れを受け継ぐ尼崎大覚寺狂言
節分の豆まきのいわれをユーモラスに見せる「節分厄払い」
2014.2.3.　尼崎大覚寺で

大覚寺身振り狂言
節分　厄払い
2014.2.3.









◎「節分　厄払い」　あらすじ

後家さんが節分の用意をしているところに、厄払いが来たあと　鬼が後家に近づきます。
鬼はいろいろ変装するが二度まで失敗します。

三度目に打出の小槌を使って変装して、女の好みの品を取り出して近づいてきます。 後家は大喜び。

鬼とは知らずに欲を出した後家は　小槌が欲しくなり、酒を呑ませて眠らせ、小槌と衣服を剥ぎ取ります。
後家は鬼の正体を見て驚き逃げ出す。

目を覚ました鬼は後を追うが、後家は節分で用意していた豆を投げつけ、鬼は退散する。

この「節分厄払い」は節分に壬生狂言として、京都壬生寺でも奉納されていました。











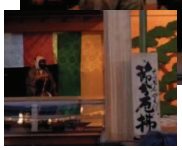
雨も上がり、薄暗くなった午後5時20分　身振り狂言「節分厄払い」2回目が始まった





節分の朝　後家さんの家では門口の両側の軒先に飾り付けた柊に鰯の頭を刺し、
豆をまき、家内安全を祈り、怖い鬼からの厄払





節分の飾り付けが終わった頃、厄払いがやってきた。
後家さんは怖い鬼を追い払うおまじないをするよう頼む



厄除けは　鬼払いのまじないをしてかえってゆく
「鶴は千年　亀は万年　東方朔は九千年三浦大介　百六つ　向こうから鬼が来た
私が払いましょう」と唱えて、厄除けのまじない。 豆と銭を貰って帰ってゆく。





厄払いが帰った後、鬼が後家の家に現れた



後家さんの家に鬼がやってきた
後家さんは　鬼の姿をみて　びっくり仰天　逃げまどう







後家さんに逃げられた鬼は色々策略をめぐらし、蓑と笠をかぶって旅姿に変装して近づくが、
見破られて失敗する









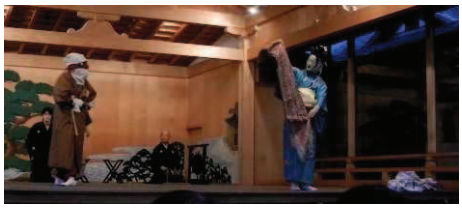


失敗した鬼は門口の鰯の頭を食べて、次の算段　　打ち出の小槌を取り出し、着物を取り出し変装
後家さんには美しい着物や帯を出してあげると誘いかける









打ち出の小槌で美しい着物や帯を出してもらった後家はんは有頂天



欲が出て 「打ち出の小槌」が欲しくなった後家はんは、小槌でお酒を出して飲みかわそうと持ちかける



上機嫌で酒を飲みかわすうちに、変装した鬼は酔いつぶれて、眠ってしまいました



後家さんは恐る恐る寝込んだ鬼に近づいて「打ち出の小槌」を取ってしまいます



づに乗った後家さんは変装をはがして 顔を見てやろうと着物や覆面をはがしにかかります



着物や覆面を取り去って現れた顔は「鬼」 驚く後家の声に目を覚ました鬼が追いかける



後家さんは逃げ惑いながら、鬼の払いな豆の箱を手に取り、豆を鬼に投げつける



これはたまらんと 鬼はついに逃げ出してしまいます
後には、打ち出の小槌も美しい着物もみんな消えてなくなっていました



鬼は豆まきで追い払われました

「鬼(病気・災厄・貧困など様々な不幸)に負けずに、マメに働くことによってこそ、福徳は得られるものである」

この狂言はこのことを教えた狂言で、 後家が鬼を追っ払った後は、鬼の小槌も着物も消えうせ、
後家はそれが危険な誘惑と悟るとありました。 ーインターネットよりー



壬生狂言と同じ流れを受け継ぐ尼崎大覚寺狂言
節分の豆まきの徳をユーモラスに説く「節分厄払い」
2014.2.3.　尼崎大覚寺で



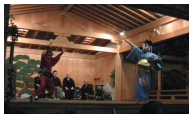




大覚寺　節分のシンボル「昆布だるま」
薄い昆布の着物と紅白の水引をまとった珍しい姿の「起き上がりこぼし」。
「こぶ」の語感が「喜ぶ」に通じめでたいと寺の節分に授与される。
江戸時代に昆布を着物の形に切り、張り子のだるまに着せたのが始まり。

尼崎港には北海道の昆布が大量に荷揚げされ、加工後の切れ端が使われたという。
「厄除けだるま」とも呼ばれ、背中に名前などを書き「身代わり」として1年間神棚にまつり、無病息災を祈る。





今年の節分には念願かなって、京都壬生寺と故郷尼崎の大覚寺の節分狂言を見ることができました。
伝統の身振り念仏狂言　もう忘れかけていましたが、実に新鮮で舞台に引き込まれてしまいました。
古臭いといわずに見てみるのが一番　自分にすっと入って　楽しい時間でした。 また、ひとつ故郷自慢のが増えました

「節分厄払い」後日談　厄払いが後家さんに言う口上



大覚寺や壬生寺で見た身振り狂言「節分厄払い」に出てくる厄払い
後家さんの家にやってきた厄払いが　魚釣り、鶴や亀など目出度い動物の
の真似をして、鬼の厄払いをする。
狂言を見ていて、私はよく知らず、「これはなんや??」と不思議やったのですが
帰って調べると　かつて　大晦日・節分には厄払いが各家を巡って、
「鶴は千年、亀は万年、東方朔(とうほうさく)は九千年、
三浦大介(みうらのおおすけ)百六つ、向こうから鬼が来た私が払いましょう」
と　目出度い此の口上で厄をはらって、謝礼をうけたという。
かつては、厄払いが各家を巡ってこれを唱え、謝礼に年の豆と銭を包んだもの
をもらい受けていたが、今では全く見られなくなった。





鶴亀は長寿の生き物。三浦大介は、源頼朝の忠臣三浦義明のことである。
三浦大介は、源頼朝の忠臣三浦義明のことで、源頼朝の運は三浦大介が衣笠城で死に、その族党を頼朝に提供することでひらけた。
　三浦一族が衣笠城に立てこもった際に、大介義明は「われらは源氏累代の家来である」として、「生き残って頼朝様を助けろ」と皆を逃がし、わずかな郎党と共に城郭で戦死した･･･。
はるかのち、頼朝は、三浦大介の17回忌が衣笠城で営まれたとき、鎌倉から来て墳墓に拝礼した。
そして「鶴は千年、亀は万年、三浦大介百六つ」の言葉が語り継がれるようになったという。
死んでも　頼朝から確をもらっている大介は　鶴亀よりもめでたい。享年の89歳に17年を加えた現在(106歳)も生きているという意味だという。

この「厄払い」 米朝の落語を聞いていたら、不意に「厄払い」の話が始まり、上記した口上が出てきて、びっくり。 やっぱり、かつては、厄払いの仕事とこの口上は有名だったようだ。(落語「厄払い」の落ちに　この口上が使われている)

また、この落語「厄払い」の話は大阪・東京どちらの落語にもあるという。
ご存知の方多いかもしれませんが、次ページにインターネットでみつけたその抜粋です

落語「厄払い」 あらすじ

http://www.niji.or.jp/home/dingo/rakugo2/view.php?file=yakubarai より



めでたい口上で厄をはらう厄払い
2014年壬生狂言「節分」より

頭が年中正月の与太郎。 何をやらせてもダメなので、伯父さん夫婦の悩みの種。
当人に働く気がまるでないのだから、しかたがない。
お袋を泣かしちゃいけないと説教し、「今夜は大晦日だから、厄払いを言い立てて回って、豆とお銭をもらってこい」と言う。
小遣いは別にやるから、売上げはお袋に渡すよう言い聞かせ、
厄落としのセリフを教える。
「 あーら　めでたいなめでたいな、
　今晩今宵のご祝儀に、めでたきことにて払おうなら、
　まず一夜明ければ元朝の、門(かど)に松竹、注連(しめ)飾り、床に橙鏡餅、蓬莱山に舞い遊ぶ、
　鶴は千年、亀は万年、東方朔(とうほうさく)は八千歳、浦島太郎は三千年、三浦の大助百六つ、
　この三長年が集まりて、酒盛りをいたす折からに、悪魔外道が飛んで出で、妨げなさんとするところ、
　この厄払いがかいつかみ、西の海へと思えども、蓬莱山のことなれば、須弥山の方へ、さらありさらり」
というものだが、伯父さんの後について練習しても文句が覚えられないので、紙に書いてもらって出かける。

表通りで 「ええ、こんばんは」 「何だい」 「厄払いで　ござんす」「もう払ったよ」
「もうーべん　払いなさい」「何を言やがる！」　　･･･････ 省略 ･･･････
追っ払われて 「えー、厄払いのデコデコにめでたいの」と　がなって歩くと、おもしろい厄払いだと、
ある商家に呼び入れられる。　　･･･････ 省略 ･･･････
「おまえは何しに来たんだ」とあきれられ、ようやく「仕事」を思い出す。
　表戸を閉めさせて「原稿」を読みだすが、つっかえ　つっかえで　はかどらない。
「あらあらあら、荒布、あらめうでたいな。あら、めでたいなく」「おい、めでたくなくちゃいけない」
「くの字が大きいんだ。鶴は十年」「鶴は千年だろ」「鶴の孫」「それだって千年だ」
「あ、チョンが隠れてた。鶴は千年。亀は……あの、少々うかがいます」
「どなたで？」「厄払いで」「まだいやがった。何だ」「向こうの酒屋は、何といいます」「萬屋だよ」
「ええ、亀はよろず年。東方」 ここまで読むと、与太郎、めんどうくさくなって逃げ出した。
「おい、表が静かになった。開けてみな」
「へい。あっ、だんな、厄払いが逃げていきます」「逃げていく？　そういや、いま逃亡(＝東方)と言ってた」

参考　大阪落語　米　朝「厄除け」　youtube　http://www.youtube.com/watch?v=XpIOixiHKXA
　　東京落語　小三治「厄除け」　youtube　http://www.youtube.com/watch?v=vKh8GLguepQ